
姿を変えて

ミユキハルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姿を変えて

【Nコード】
N6649R

【作者名】
ミユキハルト

【あらすじ】
学校からの帰り道。急に雨が降り出した。通り雨だ。雫と太一は公園のベンチで雨宿りする。頭上の濃く茂った木の葉が雨を防ぐ。まるで二人を避けるように降る雨は、一向に止む気配がなかった。雫は自分の腕を抱く。太一と肩が触れるくらいの距離を気にしたわけではなかったが、なんだか気まずかった。沈黙は自然と降りた。

学校からの帰り道。突然、雨が降り出した。

でも、遠くの空は明るかった。

「げ。傘なんて持ってないって」

目の上に手をかざして、頭上の暗く分厚い雲を睨みつけながら太一は唸った。

「たぶん、通り雨だよ。近くで雨宿りしよ？」

雫の提案に、太一は頷く。

「そうだな。——あ、そのベンチなんていいんじゃないか」

そう言い終わるかしないうちに、我先にと、太一は走っていつてしまった。

一人だけ残された形になって、ほんの少し、雫はため息をついた。小さな公園。あるのは、赤いブランコと青い滑り台。

彼の指したベンチは、それらより少し奥にあった。公園の隅。ちようどその上にある木々の、青々と濃く茂った葉が雨を凌ぐにはびつたりだった。

雫が小走りで太一に追いつくと、彼はベンチの前でしゃがみこんで何やらブツブツと呟いていた。

「……どうしたの？」

不審に思って訊くと、フフンと太一は得意そうに笑った。

「大丈夫だ。どこも汚れてない。制服でも普通に座れるぞ、雫」

なんだ、そういうことかと、雫は笑った。

「わざわざ気にしてくれただ？」

「尻が濡れるのは嫌だろ、誰だって」

はい、と太一は手持ちのタオルをベンチにかけた。

ギリギリ二人で座れる大きさだった。

「念のため、と。よし。これでOKだな。雨、すぐ止むといいな」

「そうだね」

太一の隣に腰掛けながら、雫は頷いた。

遠くの空を見上げる。

雨は、まるで自分たちを避けるように降っていた。

（なんだか、わたしたちだけ取り残されたみたい……）

たった二人だけの世界。

心細くて、雫は両腕を掻き抱いた。

視界に、誰もいない。ただ、太一が隣にいただけ。

すぐそばに。肩が触れるほど近くに。

（少しはドキドキしたっていいのに）

こういうシチュエーションはあまりない。少女マンガでいう、すごくおいしいシーン。

（幼なじみで付き合っちゃうのって、現実ではありえないよね）

まず、異性として認識できない。小さい頃から常に一緒にいる仲だから、何でも話すことはできる。

でも、それとこれとは話が違う。

自然と沈黙が降りた。

さっきまで歩きながら喋っていた、他愛のない会話。なんとなく、それをするのは躊躇われた。

（だって、雰囲気違うんだもん）

微妙に気まづくなっている。たぶんそれは、太一も同じだ。

「雨、止まないな」

「——うん」

ただ、前だけを、空だけを見つめる。

ふーっと、雫は息をついた。

そして、目を閉じる。

（なんだか肌寒いかも）

吐く息が白っぽい。

ぼつかりと広がる青空に、思わず吐息がこぼれた。低い雲は眼下にあって、空にへばりつくような雲は遥か向こうにあって――

地上と山頂では景色が違う。

気が付くと、雫の頭上は青だけだった。

（あれ？）

いつの間にか、周囲は非現実的な風景に様変わりしていた。

綿飴のようなふわりとした白雲の隙間から、山の緑がいくつも見える。

雫のいる場所は、それらよりも高い所にあった。

どこかの山頂。どこかの展望台。初めての場所だ。ここがどこだかわからない。

（わたしってば、いつ、リフトに乗ってここまできたんだろう？）全然覚えていなかった。

代わりに、というか妙に、今自分はここに立っている、という強い実感だけがあった。

「これって……現実、なんだよね？」

意識ははつきりしている。夢じゃない。それでも夢ではないかと疑ってしまうのは、余りにも心が解放感に満ちていたからだった。

（なんだか、体がふわふわして気持ちいいな）

雫は眠るように目を閉じた。

視界が平らになる。

次に気が付くと、雫は草を食べていた。

青々とした爽やかな草原の中。すぐ隣の雄馬と同じように、しばを振って食べていた。

ムシャムシャムシャムシャ。おいしいな。

そう思っていると、隣の彼が思い出したように口を開いた。

「こうしていいいの？ 日没までに帰らないと、もう二度と目覚めなくなってしまうよ？」

（帰る？ どこに？）

彼の言っていることが、雫にはさっぱりわからなかった。

自分は馬。彼のそばにすることが一番の幸せ。

拒むように首を振ったが、彼は急かすように鼻先で雫の胸を小突いた。

「僕の後についてきて。さあ、こつちだ！」

彼は勢いよく駆け出した。その後を、必死に雫は追う。

走って、走って、走って、走って。

心臓はドクドクと早鐘のように打ち、肺は荒い息のせいで鈍く痛み、脚は鉛のように重くなった。何度か転びそうになったが、雫はそれでも走ることを諦めなかった。速度を全く緩めずに、まっすぐまっすぐ駆けていく。

彼の白い背を懸命に追いかけた。

雫はジリジリと、原因のわからない焦りに胸が焼かれていくのを感じていた。しかし何よりも彼を見失ってしまうほうが怖くて、絶対に離れたくなくて、力の限り走った。

やがて太陽が地平線まで傾き、空は赤々と燃えた。

（あんなに綺麗な青だったのに）

赤は次第に、二頭の馬の前に大きな門を形成した。よく見るとそれは鳥居で、奥にいくつも重なって道を成していた。その先にはあるのは、赤いブランコ。青い滑り台。

公園だ。でも誰もいない。

「ここを潜って帰るんだよ」

彼はペロペロと雫の顔を舐めた。

まるで最後の別れみたいだった。

堪らなくなつて、雫は泣いた。

「一人はイヤ！ 一緒に来て！ 離れたくない！」

大丈夫、と信じられないくらいのやさしい声音で彼は微笑んだ。

きつとそばにいるから——……

「……おい、雫」

耳元で呆れた声がした。

薄く目を開けると、太一の白いワイシャツが見えた。

「重いんだけど」

「……重いって言うな」

思いきり太一の肩に体重を預けて眠っていたことに、雫は赤面した。

（そうだ。ブレザーを貸してくれたんだっただ）

寒いとも何も言わなかったのに、太一は自ら上着を脱いで自分の肩にかけてくれたのだ。

『これ着ろよ』

とても温かくて、ついウトウトと、雫はいつの間にか寝てしまっていた。

（……なんか余計に恥ずかしくなってきた）

雫は自分の反応を誤魔化すように、太一の背中を抓った。

いててて、と彼が声を上げるのもお構いなしに、ふと目線を前に向けた。

自分を囲む、木々の日陰の向こう。陽光にキラキラと光る地面の近くに、小さな虹を見つけた。

（わたし、帰って来たんだよね？）

まだ少し現実と夢が混同しているのか、胸がドキドキしていた。

それにしても。

ぷぷつと、雫は苦笑した。

（「僕」だって。白馬の王子様が、っーの）

秘めた想いに気づいてしまったことへの、戸惑いと恥ずかしさ。

そして、ちょっぴりの安堵感。

夢の涙に、雫の目は少しばかり潤んでいた。

でもそこに映る虹の輝きは、はつきりと恋の色だった。

「――太一ね、馬になって夢に出てきたよ」

「は？ 俺が馬？ 何だそれ？」

幼なじみでその気ナシと見ていた男は、おかしそうに笑った。

雫は、太一に気づかれないように、そっとブレザーの前を引き合
わせた。

助けてくれてありがとね。

その言葉は、心の中で呟くことにした。

（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

本当は最初、雨宿りのシーンなんてなかったんですよ（笑）
でも「いきなり夢の話から入って、最後に虹ってどうなの？」って
思ってしまった……。

急な展開でしたが、まあ、夢ってこんなものですよ（開き直り）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6649r/>

姿を変えて

2011年3月23日19時10分発行